

知的障害特別支援学校美術科における 対話型鑑賞の実践的研究 —主体的・対話的で深い学びに基づく授業モデルの検討—

[本研究の目的] 知的障害特別支援学校における「主体的・対話的で深い学び」に基づく対話型鑑賞の授業モデルの検討

[今年度の目的] 中学部美術科の授業での対話型鑑賞における「深い学び」の過程の現状分析

[研究方法]

1. 対象 大阪教育大学附属特別支援学校中学部美術科の授業 (生徒6名)

2. 内容 対話型鑑賞を全5回実施/鑑賞作品は3作品



尾形光琳
《紅白梅図屏風》

上前智祐
《作品 (黄・点描)》

新木友行
《オフセンス No.7》

3. 手続き

1) 対話型鑑賞における生徒の発言の分類 (図1)

逐語録を作成し、花田 (2023) が示す「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」の3観点に基づき定義した対話型鑑賞での生徒の発言の定義に従って、対話型鑑賞における生徒の発言を4つに分類した。

2) 対話型鑑賞における「深い学びの発言」の現状分析

(1) 「深い学びの発言」がみられた時間帯

逐語録から対話型鑑賞が始まってから「深い学びの発言」がみられた時間帯を記録した。

(2) 「深い学びの発言」が出るまでの過程の分析

逐語録を基に「深い学びの発言」がみられる前の発言の内容を分類し、「深い学びの発言」がみられる要素を検討した。

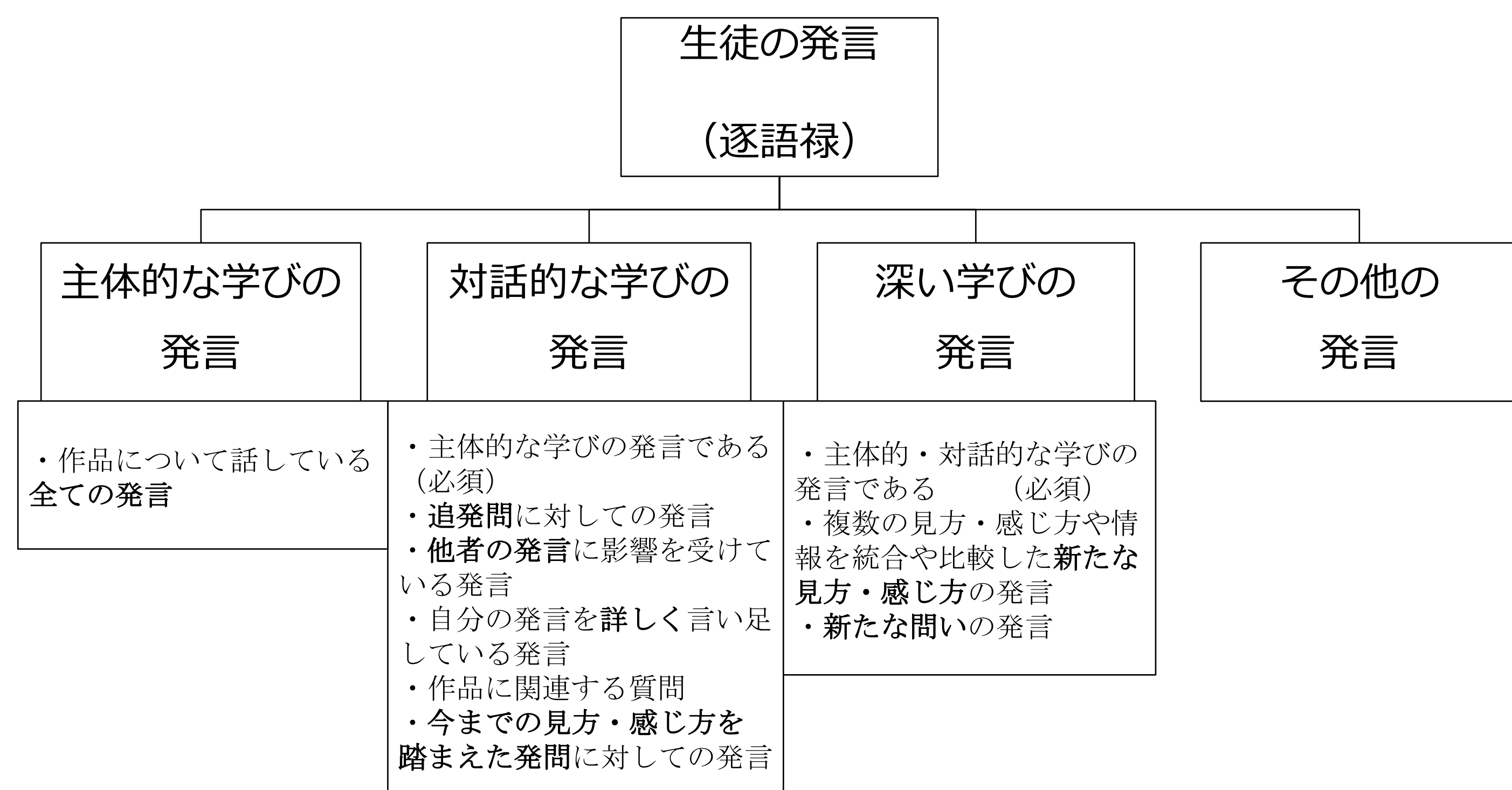


図1 対話型鑑賞における生徒の発言の分類 (4観点)
(花田 (2023) の対話型鑑賞における生徒の発言分類 (4観点) を改訂)

[結果]

1. 生徒の発言の分類 (図2)

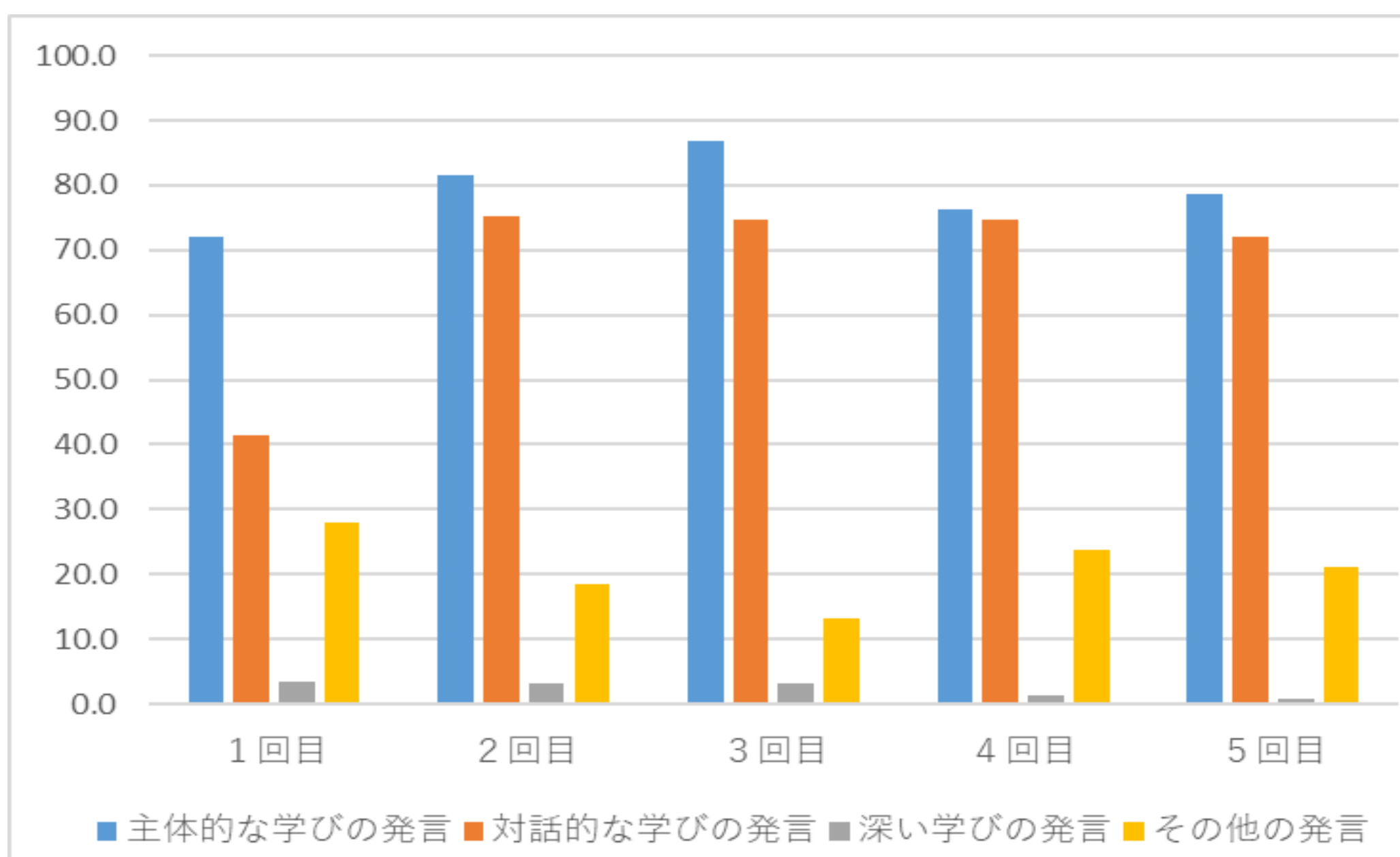


図2 4観点での生徒の発言の割合

「主体的な学びの発言」が一番多く、常に生徒の全発言数の70%以上であった。

「対話的な学びの発言」は、1回目以外は生徒の全発言数の70%を超えていた。

「深い学びの発言」は生徒の全発言数の5%にも満たないことがわかった。

「その他の発言」は、毎回20%程度あることがわかった。

2. 「深い学びの発言」の現状分析 (図3)

(1) 「深い学びの発言」がみられた時間帯

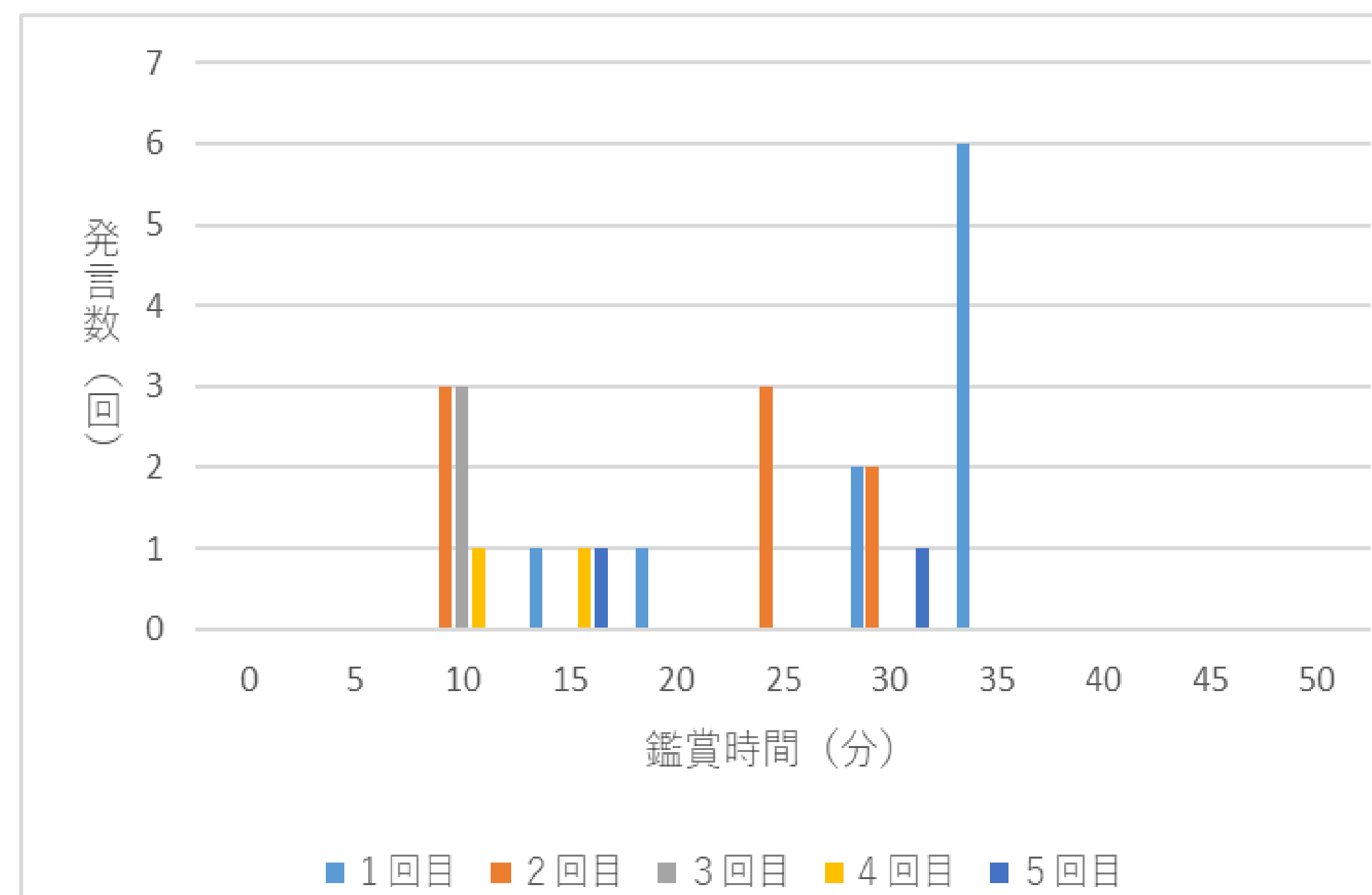
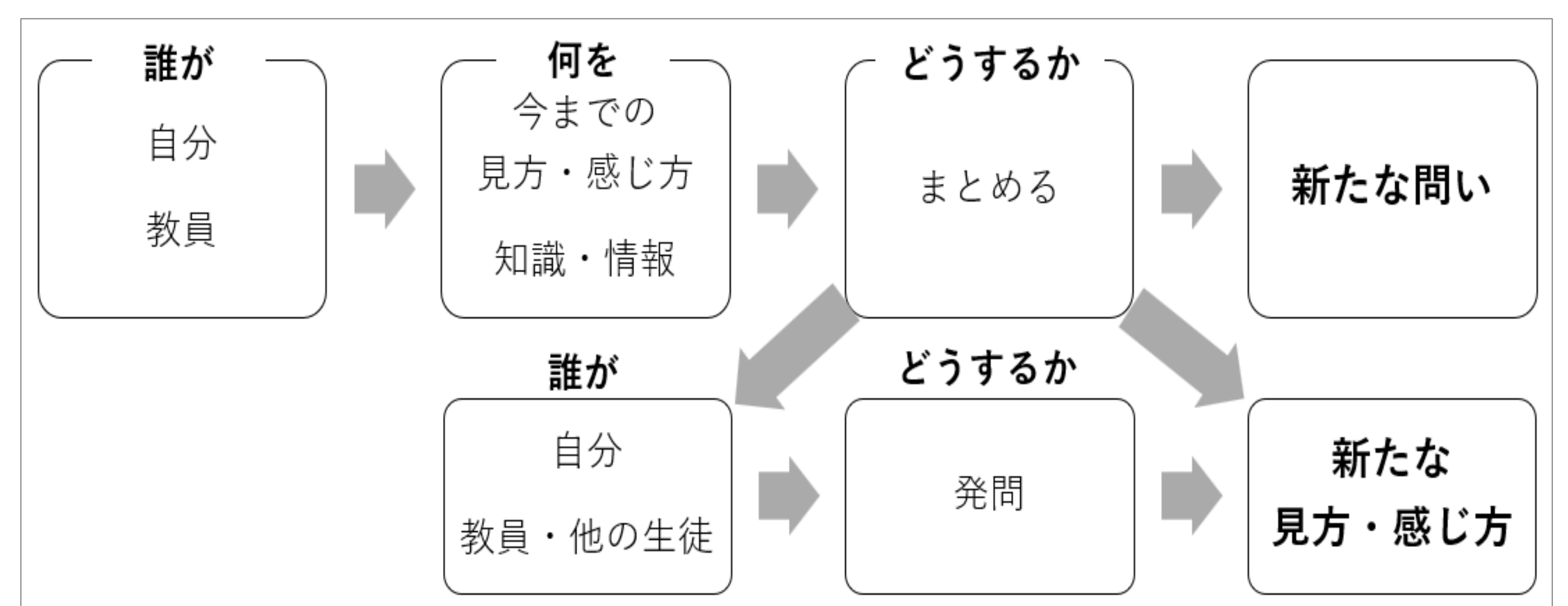


図3 鑑賞時間内での「深い学びの発言」の分布

対話型鑑賞の鑑賞時間が40分程度あった1・2・5回目は、鑑賞開始10分程度と30分程度に「深い学びの発言」があった。

鑑賞時間が20分程度程度の3・4回目は、10分程度に「深い学びの発言」があった。

(2) 「深い学びの発言」が出るまでの過程の分析



[考察]

・結果1より、現状では「深い学びの発言」が生徒の全発言数の5%にも満たないことから、知的障害特別支援学校での美術鑑賞における深い学びに向かう過程を検討し、主体的・対話的で深い学びを実現する授業モデルを検討することに意義があることを改めて確認した。

・結果2(1)より知的障害のある生徒は、10分間程度の対話の内容を統合して「新たな問い」や「新たな見方・感じ方」を生み出すことができると考える。それは、40分程度の鑑賞時間で2回「深い学びの発言」がみられたことから推測される。

・結果2(2)より「深い学びの発言」に発展するには、鑑賞の中で出てきた見方・感じ方を一旦まとめることが必要であると考える。これは、鑑賞者である知的障害がある生徒が複数の情報を統合する過程を助ける手立てとなっていると推測される。